

関西大学インフォメーションテクノロジーセンター年報 第9号（2018）発刊にあたって

インフォメーションテクノロジーセンター所長
文学部教授
柴 田 一

『関西大学インフォメーションテクノロジーセンター年報 第9号（2018）』発刊にあたり、3篇の教育・研究報告をいただいた。

『クチコミサイトを用いた効率的販売促進のための考察』は、消費者、つまりユーザのクチコミ情報であるテキストデータを、現在第3次ブームと呼ばれている AI（人工知能）の要素技術でもあるテキスト・マイニングにより分析し、購買行動をシミュレーションしている研究報告である。これは、「21世紀の石油」として世界中で注目され、とりわけ日本では国を挙げて世界からの遅れを取り戻そうとしているデータ・サイエンスを経済の分野、それも身近な化粧品の購買行動に応用した報告である。

『英語速読ソフトの開発と実践に関する一考察』は、現在流通している速読ソフトウェアでは実際の英語教育の現場においては行き届かない点、つまりは現場のユーザの要望を採り入れたソフトウェアを開発し、これを実際に教育で用いて、その評価も行ったという報告である。また、『視線とハンドジェスチャーを併用したポインティング機能の実装』では、非接触インタフェースである視線入力とジェスチャー入力を併用して、お互いの長所を活かして相手の短所を補う、より優れたユーザインタフェースの開発をし、その評価も行っている。これら2編に関しては、次のような格言とも呼べる言葉が当てはまる。

それは、マサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボには、創設者ニコラス・ネグロポンテの有名な言葉に「Demo or Die（実証しなければ無価値）」というのがあり、近年は「Deploy or Die（実装しなければ無価値）」という標語を打ち出している。かつて（おそらくはインターネットが今日のように普及する以前）は、アイデアの優秀さや、それを理論上のモデルにより評価したものが研究論文となっていたが、現在では、まさに「Deploy or Die」のとおり、実物がなければ机上の空論になってしまう。Google や Facebook の有名な「ハッカソン」においてもそうである。アイデアをその場で実現までしてしまうのである。この意味でも後者2編の報告は、実装まで行った価値ある報告と言える。

今回の3編の報告に加えて、IT センターの活動報告に共通していることは、いずれにも「ユーザ目線」という考えが入っていることである。私が IT センター所長を拝任してから10

年が過ぎた。就任当時の IT センターは、IT センターがやりたい、あるいは、良かれと考える先進的なサービスを提供してきたが、現在では、ユーザが求めるサービスを先進的な方法で実現する、というように変わったと思っている。今後も時代と共に進化していく IT センターの取り組みを、IT センター年報を通じて読み取っていただければ幸いである。